

2012年 日本語教育実習報告書作成によせて

日本語文化専攻日本語教育学講座
准教授 鷲見 幸美

本年度も多くの方々のご理解、ご協力を賜り、8名の実習生が、日本語教育実習を経験することができた。ご協力くださった名古屋大学留学生センターの関係各位に、心よりお礼申し上げる。また、日本語授業に参加してくださった学習者のみなさんにも感謝の意を表したい。学習者のみなさんの熱心で協力的な参加があったからこそ、実習生が最後まで高いモチベーションを維持し、教師としての自覚を高め、実習を終えることができたのだと思う。また、ティーチングアシスタント (TA) として、実習生をサポートしてくれた、本専攻後期課程在籍の4名の大学院生にもお礼を述べたい。

本年度の日本語教育実習は、昨年度までとはかなり様変わりしている。昨年度までは、春季実習と夏季実習に分かれていたが、本年度からは春季実習に一本化し、実習期間をこれまでの2週間から3週間に延長した。一本化した理由は、ここ数年、「春季実習には参加するが、夏季実習には参加しない」という学生が少なくなく、夏季実習不参加の理由が「実習をしたくないから」ではなく、「研究（特に、修士論文執筆）との両立ができないから、やむを得ず」というものであったためである。それが理由になるかならないかはともかく、そのように考えて実習を避けるのだとしたら、非常に残念なことである。夏季実習にも参加する学生は、「日本語教授法及び実習」を履修し、その授業の中で、「自分たちの春季実習を振り返り、課題を見つけ、それをいかに改善していくかを考える」ということを繰り返し行ってきた。しかし、夏季実習に参加しない学生は、春季実習の授業後に TA とわたしからのフィードバックを得るものの、「やりっぱなし」で、自分の授業実践を振り返り、成長の機会とするということがなされないままであった。この問題を解決するため、一本化を決めた。一本化は功を奏し、春季実習に参加した8名の学生が全員「日本語教授法及び実習」を履修し、自分の授業、実習全体を十分に振り返ることができた。

しかし、「春季実習を踏まえて夏季実習を行う」ことの利点が、実習の一本化により失われてしまう懸念もあった。まず、春季実習での反省を踏まえて、夏季実習で自らの課題に取り組むことができない。次に、実習の目的に段階をつけることができない。昨年度までは、春季実習は TA のサポートがあり、夏季実習はそのサポートなしで行っていた。また、春季実習は、自分の担当する授業の教案作成と授業実践を主眼とし、夏季実習はそれに加えて、コース運営（学習者募集やコース・デザイン等）の経験も目的としていた。しかし、一本化により、その「二段階の実習」が不可能となった。そこで、実習期間を3週間に伸ばし、最初の2週間は従来の春季実習のように TA とチームを組んで行い、最後の1週間は実習生のみで行うこととした。また、学習目標の設定、学習者募集、事前・事後調査等、

コースの運営についても経験できるようにし、実習生のみでデザインする特別活動の時間も設けた。それにより、これまでの春季実習と夏季実習で得られた経験を、1回の実習でも最大限得られるようにしたつもりである。とはいえ、かつての夏季実習は、春季実習後に十分な準備期間があったが、今回はない。そこで、「日本語教授法概論 b」の授業活動で、日本語教育実習の準備も兼ねられるように意識した。

しかし、このような試みが初めてであったこともあり、実習生には、余計な負担を強いってしまったように思う。最大の問題は、準備時間の少なさである。日本語教育の現場が、必ずしも十分な準備ができる環境にあるわけではないが、初めて日本語教育の教壇に立つ学生にとっては、もう少し時間的な余裕が必要であっただろう。また、教授者として、「日本語教授法概論 b」の授業は、日本語教育実習をかなり意識し、実習に結び付くようなタスクを課したつもりでいたのだが、実習生にはそれがあまり意識されておらず、十分に活かされなかったようである。アドバイザーとしての今後の課題としたい。

そのような日本語教育実習ではあったが、実習生それぞれが、日本語教育の面白さと難しさを体感し、学びの機会としてくれたことを大変嬉しく思う。この実習での経験を、今後に生かし、日本語教授者として活躍してくれることを切に願っている。

不十分な点も多々ある実習、実習報告書ではあるが、広く皆様に読んでいただき、ご助言やご批判をいただきたい。この報告書が、日本語教育実習にさまざまな形でかかわる方々に、多少なりとも参考になれば幸いである。